

Ready Set Go!

準備
開始

特集

子どもたちのやる気を
継続させるには〈理論編〉〈実践編〉

Tips for Activities!

~やってみよう 英語活動~ 好きなものは何?

外国語, はじめの一步は
おとかん
「音感」で

VIVA 100KING! 「ミニホワイトボード」

子どもたちのやる気を継続させるには〈理論編〉

子どもたちのやる気の鍵となる「動機づけ」。意欲的に授業に取り組む子どもたちの姿はいかにして実現できるのでしょうか。「動機づけ」の理論について物井尚子先生にお伺いしました。

はじめに

私が初めて motivation ということばを専門的に勉強したのは大学生のときでした。「動機 = motivation」と受験のときに勉強した訳語をそのまま当てはめているうちに、日本語と英語の意味がずれているように感じました。改めて辞書を引き直してみると、動機は「人の行動を決定する意識的・無意識的原因」（『大辞林』）とあり、英語の motive が一緒に書かれていました。一方、motivation は「人間および動物の行動を喚起・維持・推進・規制する過程」（『ジーニアス英和大辞典』）と書かれており、「動機づけ」ということばが添えられていました。

私たち教師は、子どもたちに英語の勉強を始めさせるだけでなく、そのやる気を方向づけたり、持続させたりすることも仕事であり、後者のほうがずっと長い時間をかけた取り組みで、紆余曲折があり、大変であることを知っています。本稿では、言語学習の動機づけについて、さまざまな研究によって明らかになっていることを整理します。先生方の日々のご指導に繋がっていただけたらと思います。

動機づけの種類

子どもたちは、どうして英語を勉強するのでしょうか。「英語が好きだから」と答える子どもはたくさんいます。さらに質問を続けます。好きだから英語を勉強するのか、という問いに「〇〇したいから英語を勉強したい」「△△だから英語を勉強しないと」というような理由を話してくれる子どもたちは、それほど多くはないようです。「英語のゲームは楽しいから」「□□先生が好きだから」のように、日々の英語の授業に楽しみを見出す子どもたちもいます。こういった反応を、動機づけ研究の理論を使って考えてみましょう。

言語学習において、その成長に影響を与えるさまざまな学習者要因があります。その中で、最も盛んに研究がおこなわれてきたのが動機づけです。1990年代に入り、教室環境での動機づけ研究が活発になると、教育心理学の分野から、**内発的動機づけ** (intrinsic motivation) と **外発的動機づけ** (extrinsic motivation) という2つの動機づけが注目されるようになりました。内発的動機づけとは、楽しみや満足感を得るために、それ自体のためにおこなわれる行動を引き起こすもの (Dörnyei, 2001) と定義されます。一方で、外発的動機づけは、報酬を得る、罰を逃れるなどの道具的な目的を果たすためにおこなわれる行動を引き起こすもの (Dörnyei, 2001) とされています。

内発的動機づけがより重要であることは、早くから指摘され

てきました。「英語を勉強したい」という明確な思いがあって学習者が英語の授業に臨んでいる場合には、学習者が積極的に授業に参加し、語学力をアップさせていこうと目に見えるようになります。一方で、「シールが欲しいから」「ゲームに勝ちたいから」というような外発的な理由から学習者が英語の授業に参加している場合には、その学習者が継続して積極的に授業に取り組むことができるでしょうか。邪魔をする要因が至る所に潜んでいるような気がします。シールがもらえなくなってしまうと、学習者はやる気をなくしてしまうのでしょうか。ゲームがない授業を始めたら、学習者はもう目を輝かせてくれないのでしょうか。教師としては、悩ましいところです。シールを配ることが、子どもたちが英語の学びを楽しむという本来のねらいからすり替わってしまうことのないように、教師は常に気を配る必要があります。

外発的から内発的動機づけへ

エドワード・デシ (Edward Deci) とリチャード・ライオン (Richard Ryan) の二人が提唱した **自己決定理論** (Self-Determination Theory) は、内発的動機づけと外発的動機づけを別物と捉えるのではなく、〈無動機→外発的動機づけ→内発的動機づけ〉の順に同一軸に並べました。この場合、動機づけの違いは「自分で決定する」程度によるものだとされています。外発的動機づけは、**自律性の度合い**によってさらに4段階に分かれます。最も外発的なのは、誰かに強制されてやっていると感じる自己決定段階である**外的調整**、次に、やらないと不安だと感じてしまう消極的な自己決定段階である**取り入れ的調整**、さらに内発的になってくると、自分にとって大切だからやる、という積極的な自己決定段階である**同一視的調整**、最も内発的動機づけに近いのは、他にやりたいことがあったとしても、自然とその行動を優先させてしまう（させることができる）自己決定段階である**統合的調整**の順に並びます。この理論が画期的なのは、私たち教師の可能性を広げる点ではないでしょうか。すなわち、子どもたち一人ひとりへの積極的な声かけ、興味・関心を引きつける学習材の提示のように、さまざまな教師の働きかけが、子どもたちの動機づけの質を変化させることができます。

さらに、デシとライオンは、自己決定的な行動を生み出すためには、3つの条件が必要だとしています。1つめは、学習者が主体的に学習に取り組むこと (**自律性**, autonomy)、2つ

めは、自分はその学習をやり遂げる力があると思うこと（有能感, competency), 3つめは、その学習がおこなわれる場面にいる教師や友だちとよい関係を築いていること（関係性, relevancy) です。これらの条件がそろえば、子どもたちが自分の行動を自ら決める機会が増え、徐々に内発的動機づけが高まっていくことが考えられます。子どもたちは、言語学習については初心者ですから、教師は、彼らが自分で判断できるほどの語学力を持ち合わせていないと考えてしまいがちです。しかし、What fruits do you like? の質問に答えるのは難しくても、先生の Melons, strawberries and peaches. Which fruits do you like? という問いには、答えられるかもしれません。3つの果物の名前を先生が挙げてくれたからです。3択から選ぶと、という経験は小粒ながらも、子どもたちに、自分で決めたいという思いを芽生えさせるのではないかと思います。

学習動機と秋の空？

学習者の動機がいかに移り気なものであるかは、教師が一番よく知っています。子どもたちは、やる気に満ち溢れているかと思いきや、次の瞬間、そのやる気をどこに置いてきてしまったのだろうかと問いただしたくなるほど別人になってしまうことがあります。やる気が続かない限り、学習行動も持続できないわけで、いかに学習動機を高い状態で維持していけるかは、教師にとって大きな、そしてとても困難な問いです。それは研究者にとっても同様であり、**長期的な動機づけ** (long-term motivation) というのは、これからさらに研究を進めなくてはならない分野です。

先日、言語教育心理学学会第三回国際大会 (PLL3) (PLL=Psychology of Language Learning) で早稲田大学を訪れ、ゾルタン・ドルニエイ (Zoltan Dörnyei) 先生の講演を聴くことができました。内容はまさにこの「長期的な動機づけ」についてであり、このために教師ができることとして、**vision** と **motivational currents** についてお話しされていました。

vision とは、学習者もつ明確な展望を意味しており、学習者にとって有意義なビジョンを示してあげることが長期的な動機づけには欠かせないということでした。ビジョンがしっかりしていれば、学習者自身が学習行動を活性化できますし、たとえ邪魔が入ったとしても、また学習行動を復活させることができます。学習者が自分の英語学習についてのビジョンを明確化すること、また、そのビジョンを追求するために、教師がすべきこととしては、①学習者の不安を軽減するために、授業内に学習者が取り組む活動を注意深く精選し、ルーティン化させること、②学習者が進歩を肌で感じられるように、よく練られた小さな目標を数多く用意すること、を提案してくださいました。授業中に子どもたち自身が進歩を感じられる瞬間があれば、それは満足感、さらには達成感につながり、動機づけをよりいっそう高める機会につながります。このようにして過去の成功体験が積み重なっていけば、学習動機に勢いをつけることができます。この一連の流れを motivational currents ということばで説明されていました。

ドルニエイ先生のお話を聞きながら、学習者が不安を感じないように、毎回の授業の流れをパターン化して、それに沿って45分を進めていくことというのは、私たち教師が常にやっていることだと改めて思いました。英語が得意でない子でも、“Hello, hello....”と先生が歌いだすと、英語の授業の始まりだとわかって席につきます。“It’s time to say good-bye....”の歌が聞こえると、授業の終わりだと机の上を片付け始めます。先生が絵本を取り出したら、その絵本の表紙をクラス全員で注意深く見ていって、お話のヒントになりそうなものを拾っていきます。いきなり英語の嵐に襲われることはないとわかっていれば、ゆったりとした気持ちで表紙を眺めることができます。英語表現以外の部分で、子どもたちの不安を取り除くためにできることは少なくありません。

子どもたち自身が「進歩を感じられる工夫」はどうでしょうか。子どもたちにとって聞き取りが難しい英語表現があったとき、教師はあの手この手を使います。絵カードや実物教材を見せたり、ジェスチャーを用いたりします。表情を使うときもあります。それによって英語が「わかる」という気持ちが生まれます。また、その表現が先生の口から幾度となく繰り返されたなら、子どもたちはその表現をいとも簡単に操るようになります。筆者が子どもたちとよくやる活動にミッシング・ゲーム (missing game) があります。黒板に何枚かの絵カードを貼り、子どもたちに目を閉じてもらいます。その間に絵カードの1枚 (慣れてきたら複数枚) を隠して、どのカードを隠したかを当ててもらおうというものです。このとき薄目を開けている子どもたちに対して“Close your eyes.”を連呼することになるのですが、おかげで子どもたちはこの表現の達人になります。次回からは自分が先生役に立候補するためです。先生役を引き受けた子の得意そうな表情。この表情には、自分の「できる」を確信した子どもたちの満足げな心持がにじみ出ているなとつくづく思います。

おわりに

子どもたちが小学校で英語を学ぶ期間が2年から4年となります。学習時間でいえば、これまでの5・6年生での70単位時間から、3・4年生での70単位時間、5・6年生での140単位時間と3倍になるわけです。この間に、英語の学びについて、自律性に富み、有能感に満ちた子どもたちを育てることができるよう、日々の授業を工夫していきたいものです。

物井 尚子 (ものい・なおこ)

千葉大学教育学部准教授。テンブル大学大学院博士課程修了。教育学博士 (Doctor of Education)。専門は英語教育学、早期英語教育。著書に『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ』(共著、三省堂)がある。



子どもたちのやる気を継続させるには〈実践編〉

子どもたちに、やる気をもって授業に参加してもらうには「内発的動機づけ」が重要なようです。どのようにすれば、「内発的動機づけ」を促すことができるのでしょうか。『We Can!』を取り上げながら具体的な方法について、長沼久美子先生にご提案いただきます。

発表を頑張った子どもにご褒美シールを1枚。このような、外発的動機づけによってやる気にさせる授業ではなく、子どもたち自身が、「もっと知りたい!」「やってみたい!」と、主体的に取り組む授業が求められています。内発的動機づけによって、子どもがやる気になる授業です。教師は、モチベーターとして、子ども自身のやる気を引き出す仕掛けを考え、授業に盛り込んでいく必要があります。ここでは、普通の授業で子どものやる気を維持させるための工夫について紹介します。

①高学年の子どもの興味・関心を知る

高学年の子どもには、その年頃の流行など、高学年ならではの文化があります。それをよく知り、高学年の子どもの興味・関心に合わせた題材を選び、内容を構成することが大切です。また、子どもたちが他教科で何を学び、何を考え、どのように学習を進めているのか、そのことも大事な視点です。英語で扱う内容としてふさわしいか、稚拙すぎるのか判断ができます。

カリキュラム・マネジメントの視点から、他教科で学習している内容と関連づけることもできます。社会科では、歴史人物を学びますが、そのことを踏まえて、題材を選び、内容を構成していくことで、子どもの好奇心を引き出し、やる気を刺激することもできるでしょう。

実践例) We Can! ② Unit 3 24ページ Activity 「Who's this? Quiz を作ろう」

◆クラスで流行っている事柄に関する人物を取り上げる

- ・バスケットボールで遊ぶ子が多いクラス → NBA の選手
 - ・アイドル好きの子が多いクラス → 人気アーティスト
 - ・歴史好きの子が多いクラス → 戦国武将などの歴史上の人物
- 例を示すときは、子どもたちが関心をもって聞きそうな人物について扱い、自由にイメージできるようにします。

例) 人物名「卑弥呼」

- ヒント ① She is a fortune-teller.
② She is a queen.
③ She is from Yamataikoku.



②子どもの主体的な学びの余地を残す

授業の構成を考える際、子どもの反応を予想しながら計画を練りますが、子どもが自分で考えたり、考えを広げたりする時間も意識しましょう。言語習得の側面をもつ外国語活動は、教

師が主体になってしまいがちですが、重要なのは、子ども自身の内発的動機づけです。そのためには、子どもが主体的に学べる余地を残しておく必要があります。

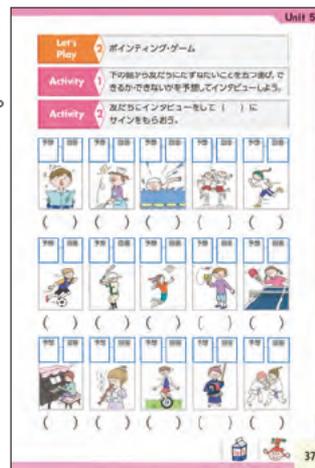
例えば、好きなスポーツを伝え合う場でスポーツの名前を学習するとき、教師は baseball や soccer などのスポーツが描かれたカードを事前に用意するでしょう。しかし、子どもたちの中には、「この中には自分が好きなものはないなあ。でも先生が用意したものだから、その中から言わないといけなかな?」と考える子どももいるものです。そこで、教師は子どもたちが自由に考えられるような雰囲気、時間や空間を提供するようにします。つづりがわからなければ教師と一緒に調べたり ALT に聞いたりして、子どもが自分の意思で自分の好きなスポーツを言えるように支援するのです。子ども自身が自分で選んで決める経験を積むことで、自己決定による内発的動機づけが高まり、子どものやる気に繋がります。

実践例) We Can! ① Unit 5 37ページ Activity 1

◆「聞いてみたい」思いを大切に

友だちに質問する活動では、「聞いてみたいことを実際に聞く」ことが、やる気を支えます。紙面に紹介されていない場合、聞きたいことを自分で決めてもいいような雰囲気を大切にしましょう。何も書いていないカードを用意したり、つづりを調べられるように辞書を用意したりすると、教師に子どもの思いを受けとめるゆとりが生まれます。活動の充実のために、ぜひ子どもに判断を委ねてみましょう。

例) 児童「ここには載っていないけど、〇〇を聞きたいなあ」
教師「自分たちでも聞いてみたいことを考えてみましょう」
児童「友だちに、どうしても聞きたいことがあるので、余白を使って項目を増やしてもいいですか?」
教師「どうぞ」
児童「やった! さっそく聞いてみよう!」



③ユニバーサルデザインの視点を忘れない

高学年になると、子どもたちはわからなくてもわかったような態度や言動をするようになります。国語や算数などでもよくあることで、外国語でも、わかったふりをしてしまう子どもがいると思われまゝ。「できるかもしれない」というような有能感を高めてやる気を引き出すためにも、「わからない」を「わかる」にする教師の支援が重要です。

例えば、「聞きとれない」を「聞きとれる」にする配慮。視覚的教材（絵カード）やジェスチャーを用いることで、聞きとれない英語表現に対して、視覚的に支援していくことはとても有効です。また、聴覚にうったえかけられるよう、声の調子に変化をつけたり、話すスピードを変えたり、ゆっくりと強調したりすることも「わかる」をサポートします。喩えの表現^{たと}を使って言い換えるなど、子どもたちの五感に届くようにし、誰にとっても「わかる」ようにする支援が教師側の工夫として求められます。

小学校の教師は、普段から子どもたちにことばが届くような話し方を工夫しているでしょう。それらの技術を外国語活動の授業でも使いこなしていきましょう。

実践例) We Can! ① Unit 4 30 ページ Let's Play 3「先生の日課をだすねよう」

◆身振り手振りを使い、どのような日課なのかを予測させる

教師が、家でどのように過ごしているのか、子どもたちは興味があります。そのため、知らない英語表現が出てきても教師がジェスチャーや関連する絵を黒板に描くだけで、表現の意味を予測しながら聞くことへ集中できます。

例) T: I always get up at 5:30. (何度か言ってわからなそうなら、起きる真似をしたり黒板に時計の絵を描いたりする)

S: 早い!! そーなんだあ。早起きして何しているんだろう。

T: I always make breakfast. (何かを切る真似をする)

S: そっかあ。ご飯作るんだあ。

T: I go to school at 7. (歩く真似をしたり、学校の絵を描いたりする)

S: ぼくは7時半に家を出るよ。先生のほうが早いなあ。



ジェスチャーや絵を交ぜてみると、子どもたちは予想しながら聞くようになり、やりとりが活発になっていきます。

④発表での好反応

子どもたちは、1年生の頃からたくさんの発表活動を体験してきました。国語でのスピーチ、生活科や理科で観察したこと、発表、運動会の表現運動も発表です。実にさまざまな場

で発表の経験を積み上げています。このような場面では、「仲間が好意的に聞いてくれる」「誰かに受けとめられている」といった他者受容感が承認欲求を満たし、やる気を引き出します。

外国語活動でも同様です。だからこそ、子どもたちが外国語でやりとりや発表をする際に、子どもの表現を称賛したり、価値付けたりする教師の支援が重要となります。

子ども同士でコメントする場を作ることも、他者受容感を生むのに効果的です。そのために、称賛するときに使う英語表現として、“Excellent!” “Great!” “Very good!” などのことばを使ってみるように子どもたちを促してみたり、日本語を使って感想を伝える場を設けたりしていきましょう。子どもにとって、教師に褒められることと同じくらい、友だちから褒められたり認められたりすることは嬉しいことであり、承認欲求を満たします。

実践例) We Can! ① Unit 8 64 ~ 65 ページ Activity「だれかのためにメニューを考えよう」



◆子ども同士が褒め合う授業をする

「だれかのためにメニューを考えよう」では、お店屋さんごっこのように、自由な発想でお店作りができるようにしましょう。おしゃれなカフェをイメージする子、たくさん食べられるがつつりメニューのお店を考える子、ヘルシーメニューを考える子、みんなが自分でテーマを決めて取り組むことで、意外なメニューが登場するでしょう。筆者の経験では、お腹がすいたお兄ちゃんに食べさせたいからという理由で、1つの定食の中に、カレー、ハンバーグ、エビフライ、ラーメンが入っている「おなかいっぱい定食」というメニューを発案した子もいました。友だちは、今まで見たこともないそのメニューに出会い、心から“Awesome!” “Fantastic!” と称賛していました。

最後に

教師は、目の前にいる子どもたちの発達段階や既存知識を考慮して、授業を考えていくと思います。そして、子どもたちが楽しんで学ぶ姿を見ることを目指し、子どもたちが学習を身近に感じられるような工夫を考え続けていくことが教師に求められているのだと思います。

長沼 久美子(ながぬま・くみこ)

神奈川県横須賀市立鶴久保小学校教諭。学級担任や専科教員の経験を基に、第二言語習得の視点から小学校外国語活動の授業デザイン研究に取り組む。



Tips for Activities!

やってみよう
英語活動

シンプルな英文の使い回しで、子どもたちと生き活きとことばを使い合える活動を紹介します。

子ども同士の対話はさせたい、でも、歩き回る活動がどうも上手くいかない、というときには是非試してみてください。

「好きなものは何？」

① 子どもたちが心を動かしそうな話題を選ぶ

思わず、「それ好き!」「あまり好きじゃない」と言いたくなる話題を選ぶのがポイントです。

② 指導者が自分のことを伝える

例えば麺類を話題にして、指導者は「大好き」ということが伝わるように表情で表しながら、I like *miso ramen*. と心を込めて伝えます。指導者の気持ちが伝わり、子どもたちも話したい気持ちが高まり、「醤油ラーメンの方が好き」「おそばの方が好き」などと言い始めます。

③ 子どもたちのことを尋ねる

子どもたちの反応を受けて、指導者は一人めに Do you like *miso ramen*? と尋ね、子どもが頷いたら、Oh, you like *miso ramen*, too! と文の形で返します。続けて別の子に I like *miso ramen*. ○○-san likes *miso ramen*, too. How about you? Do you like *ramen*? Do you like *udon*? と尋ねます。子どもの「そば」というつぶやきを受けて、You like *soba*. と応じ、さらに I like *miso ramen*. ○○-san likes *miso ramen*, too. And ◇◇-san likes *soba*. How about you? と、次々好きな麺類を尋ねていきます。

大げさなジェスチャーや高いテンションは必要ありません。常に子どもと対話しているという自然な雰囲気や大切にしつつ、「好き」という表現を繰り返し聞かせていくと、子どもたちは単語だけではなく発話の初めに I like をつけて I like *udon*. などと文で話そうとし始めます。

④ 子ども同士で対話する

ここですぐに歩き回って子ども同士で尋ね合うのはまだ難しいので、指導者がサポートしつつ活動を進めます。

- ①クラスの半分（または一列）を起立させ、新たにスポーツなどジャンルを決めて一人ずつ I like *soccer*. など好きなものを言ってもらいます。
- ②全員が言い終わったら、残りの半分（別の一列）の子どもたちが一人ずつ、誰が何を好きだったかを思い出して当てます。質問する子どもが一人を指名し、○○-san,

do you like ~? と尋ね、○○さんが Yes! と答えたら、○○さんは座ります。当たらないときは What sport do you like? と尋ねることにとよいでしょう。子ども同士の対話を全員が座るまで続けます。

質問する子どもが Soccer? と単語だけで言うなど発話が不完全なときは、指導者が「私も聞いてみるわ」という雰囲気や、答える側の子どもに向かって○○-san, do you like soccer? と正しい文で質問を繰り返します。答える側の Yes. などの発話も指導者が Oh, you like soccer! などと文で繰り返すようにします。クラス全体が、このような友だちや先生のやり取りを聞いて「こんなふうにするんだ」と確認できます。子どもたちは自分の番が来たら言ってみようと思うようになります。「聞きたい気持ち」「言いたい気持ち」をもってやり取りに参加することで、子どもたちは自力で表現を獲得していくことができるのです。

参考：『語研ブックレット3 小学校英語1』p.47



Teacher Talk

I like soccer. How about you?
Do you like soccer?
Jun likes soccer.
Yumi likes soccer, too.

like のあとの名詞が可算名詞の場合、I like apples. のように複数形になることに注意が必要です。スポーツや色、飲み物の種類、アイスクリームのフレーバーなど、不可算のものは I like milk. のように形が変わらないので、間違いが起りにくいのです。



相田 真喜子(あいだ・まきこ)

田園調布雙葉小学校において1～6年生までの英語の授業を担当。そのほかフェリス学院大学英文科において小学校英語の講義を行う。語学教育研究所研究員。

外国語, はじめの一步は「音感」で

5領域の基礎となる「音感」

新学習指導要領の外国語科では、「聞くこと」「話すこと(やり取り)」「話すこと(発表)」「読むこと」「書くこと」の5領域を扱うこととなります。これまでの「聞く」「話す」に「読む」「書く」が加わることによって、小学校の段階で「音声」から「文字」への接続が重要な課題となります。「読む」「書く」の指導を急ぎすぎず、外国語活動で身につけた英語の「音感」(自然な速度やリズム)が崩れてはいけません。小学校では、英語をたくさん聞いて声に出すことで、頭の中に「音感」を作る基礎練習が重要です。

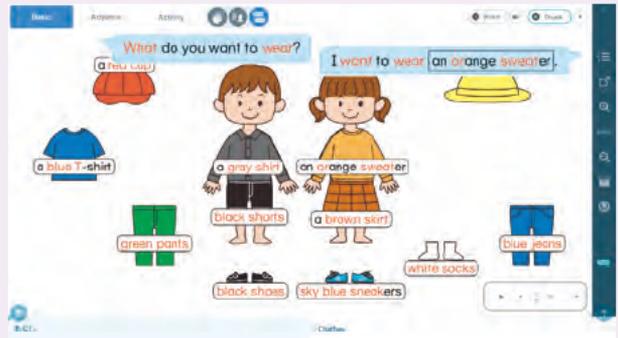
※「音感(おとかん)」は、英語の自然な速度やリズムを表現した造語です。

Chunkを使った「音感」の定着

単語や定型の会話文だけ覚えても、なかなか自然な会話にはつながりません。そこでまず単語と文の中間の chunk (チャンク: 2, 3単語のまとまり) を、リズム良くくり返し言うことで「音感」を定着させます。「音感」が定着すると、頭で考えずに自然な英文を自然なリズムで口に出したり、速度を落とさずに英文を読めるようになるでしょう。

この「音感」をつける絵辞典として『チャンツとチャンクで身につく「音感」キッズクラウン 場面で話せる英単語 Part 1』はさまざまな工夫をしています。児童に身近な約800語を chunk や短文とあわせて提示し、歌やゲームを通して「音感」をつけていきます。さら

に、リズムを作り出す「音の山」を意識させるため、chunk や英文の強勢部分を赤字で示しています。赤字をリズムに合わせて拾い読みする速読法が、「音声」から「文字」へのスムーズな接続を可能にします。



英語に触れる時数が増えた今こそ、ことばのものまねやくり返しをいとわない児童の言語習得の特性を生かして、楽しく「音感」をつける時間を定期的に行うことをお勧めします。学習内容や日々の活動に関連するものなどから少しずつ、授業前のウォーミングアップやモジュール活動に取り入れてみてください。

下薫 (Julie Kaoru Shimo)

マジカルキッズ英語研究所代表。茨城大学教育学部非常勤講師。ロサンゼルス生まれ。コロンビア大学ティーチャーズカレッジ英語教授法修士課程修了。著書に『キッズクラウン英和・和英辞典』(三省堂)、監修に『チャンツとチャンクで身につく「音感」キッズクラウン 場面で話せる英単語 Part 1』(三省堂)など多数。



VIVA 100KING!



我輩は100KING。100円SHOPは教材やお助けグッズの宝庫。今回はミニサイズのホワイトボードを紹介するぞ。

大きさは115mm×200mmと、とってもコンパクト。グループごとに配布して、子どもたちにクイズの答えを書かせるのにピッタリじゃ。ホワイトボードの良さは、簡単に書くことができ、間違えてもすぐに消せるところ。書く労力も消す労力も少なくてすむ。さらに、裏に磁石がついているから、子どもたちの答えを黒板に貼ることもできるぞ。これで答えの共有も楽々じゃ。

テレビのクイズ番組の解答者気分になれるから、子どもたちが思わず書きたくなる仕掛けになること間違いなしじゃな。

ちゃり〜ん。マーカー付属で1つ100円。お得じゃの。また会おう。ふあっふあっふあっ。



ミニホワイトボード



協力: ダイソー

小学校3～6年生対象 / 小学校英語向け 提示用デジタル教材

チャンツとチャンクで身につく!

音感

👑 キッズクラウン

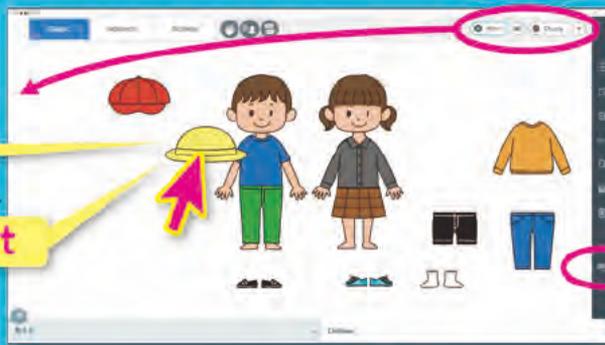
下 薫 (Julie Kaoru Shimo) ・三省堂編修所 編

場面で話せる英単語 Part 1

短い時間で、聞いて/覚えて/話せる! 新しいコンセプトの英単語学習教材!



カテゴリごとに特色のある場面を設定! 同じ英単語をさまざまなパターンで練習することができます。



● WordボタンがONの状態をクリックすると...

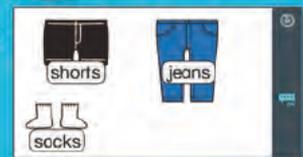
hat

● ChunkボタンをONにすると...

a yellow hat



文字の表示もON/OFF可能!



英単語ごとのフラッシュカードでも提示できます!



ゲーム性のあるActivityも収録!



歌やチャンツも収録! Clothes Chant (抜粋)

A cap, a shirt, jeans and sneakers.
These are the clothes I want to wear. ~

●収録カテゴリ

Alphabet Jingles / Animals / Classroom / Classroom English / Clothes / Colors / Conversation / Family / Feelings / Fruits and Vegetables / House and Chores / Numbers / Opposites / Routine / Shapes / Sports / Subjects / Time / Action Verbs / Weather

●販売価格

校内フリーライセンス : 38,000円 (税別)

校内年間ライセンス : 10,000円 (税別)

シングルライセンス : 4,500円 (税別)

●動作環境

Windows7/8.1/10 ※OSが快適に動作するパソコンでご利用ください。

iPad(第5世代以降), iPad Air2, iPad Pro ※iOS10以上

端末の空き容量は1GB程度をご用意ください。

商品紹介サイトもご覧ください!

<https://tb.sanseido-publ.co.jp/oyokan>
ご注文はこちらからダウンロードいただけます。

※校内ライセンスはご購入いただいた学校内の端末のみを対象とし、台数の制限なしでインストールできるライセンスです。シングルライセンスは1端末のみのインストールとなります。フリーライセンス・シングルライセンスに利用期限はありません。

本製品に関するお問合せがございましたら下記までお願いいたします。

株式会社三省堂 デジタル事業推進部 TEL:03-3230-9416 E-mail:info-tbdt@sanseido-publ.co.jp



三省堂教科書・教材サイト <http://tb.sanseido.co.jp>

三省堂

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町 2-22-14 TEL (03) 3230-9411 (編集)・9412 (営業)

●大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地 2-5-3 TEL (06) 6341-2177

●名古屋支社 〒460-0002 名古屋市中区丸の内 3-21-31 協和丸の内ビル 2F TEL (052) 953-9211

●九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金 1-3-1 TEL (092) 531-1531

●札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西 15-2-1 ラスコム 15ビル 3F TEL (011) 616-8722